

2011.2.14 冬季フォーラム

ローザンヌ運動の日本宣教への意義

～ケープタウンから発せられた根本的問い～

福田 崇 (日本ウィクリフ聖書翻訳協会総主事、国際ウィクリフ聖書翻訳アジア太平洋地区総主事)

昨年ケープタウンで開催された第三回ローザンヌ世界宣教会議に出席して、第一に感じたことはアメリカの神学校の若い学生が大勢ボランティアとして参加していたことであった。彼らは会議の熱気、雰囲気を感じて帰り、帰国後サポーターに感謝の報告をしたことであろう。アメリカの底力を感じると共に、それらを通して将来に希望が持てると思った。

壮大な計画と三つの命令

さて、会議では、私たちは神の壮大なご計画とみ業の中に置かれているということが確認された。言葉としては「創造秩序」、「和解秩序」、「完成秩序」、だが、初めに神が天と地を創造され、その創造の業の中に私たちはいるということである。

人は神のかたちによつて造られ、その管理責任の業が委ねられた。この「文化命令」において、人間はその所有者ではなく管理者であることが確認される。しかし、人間は所有者のように振舞ってしまった。そこに人間の墮落が出ている(創世記3章)。しかし神の業は変わらず、新しい天と新しい地(完成秩序)に向かって、神は人類をご自分の元に連れ戻すという和解の業としてイエス・キリストを送られたのである。

主イエスはマタイ25章で、「飢えていたときに食べさせてくれた、喉が渇いていたとき飲ませてくれた、裸であったとき着せてくれた、牢にいたときに訪問してくれた、病の

時に見舞ってくれた」というケア命令を述べている。マザー・テレサ等はこのケア命令を非常に重要視していた。フィリピン、特にカトリックではこのことを大切にし、フィリピン伝道においては「全世界に出て行って福音を伝えなさい」という「宣教命令」よりも、この「ケア命令」がまず知られている。福音派の伝統では、そのことにはあまり深く入って行かなかったのではないだろうか。

主イエスが「全世界のあらゆる国の人々を弟子としなさい、福音を伝えなさい、罪の赦しを伝えなさい、洗礼を授けなさい」と語られた。こうした「宣教命令」は、福音書の最後と使徒行伝1章8節にもある。今私たちが問われているのは、イエスご自身の復活の証人として、「文化命令」、「ケア命令」、そして「宣教命令」を包括的に捉え直すことではないだろうか。

過去200年ほどの近代宣教に眼を向けつつ、自分自身を振り返ってみると、ここ30-40年の間に大きな変化が起こっていると思われる。その発端は、1966年のベルリン伝道会議に見ることが出来るが、具体的にはローザンヌ運動において見られるものである。1974年に第一回ローザンヌ会議がスイスで、第二回は1989年マニラで、そして2010年に第三回の会議が南アフリカのケープタウンで開催された。そこで出されたケープタウン決意表明(Capetown Commitment)を見ると、この変化が具現化されつつあり、深まってきていることを実感する。

全教会が全福音を全世界に

このローザンヌのモットーとして、「全教会が全福音を全世界に」が掲げられ、キリスト者全てが、この包括的な福音宣教の参与に召されている。それは「文化命令」、「ケア命令」、「宣教命令」を総合的に受け止めて生きていくことに他ならない。

もし、「文化命令」が無視されていくなら、私たちの宣教はカルト的となるであろう。こうしたカルト的宗教は、たとえば、「1週間30時間の奉仕しなければならない」として、伝道活動の時間でその優劣を測ることがなされる。自らの世界の拡大のために、創造秩序を無視していくあり方がそこにみられる。

ある集会後の懇談会で一人のご婦人が、「自分は駐在所の警官の妻だが、その周りの掃除をしたり、道を聞いてくる人に道を教えたり、そんなことをして毎日を過している。いつかは牧師先生のように24時間福音のために働きたい」と言っておられた。その方の考え方では、自分の生活に関する事柄には価値が無く、野菜を作ることや、掃除や洗濯などの家事にも積極的な意味が与えられないこととなる。

40年前の教会には、「帰りの電車の中で一人の人に福音を伝えよ。そうしないとその人は滅びにいたる」という信仰の思いが確かにあった。もちろん伝道することは大切であるが、文化命令をしっかりと受け止めることから遊離する仕方には問題があるのではないだろうか。私たちは神のかたちに造られていて、何かを考え創り出すことができる。だからこそ、与えられた人生の中で工夫して生きる中で、秩序を与える創造者から管理者として委ねられた責任（文化命令）に参加することに眼が開かれる必要がある。

マーケット・プレイスにおける福音の価値観ということ意識して、ある牧師が「あたらしいみかんのむき方」という本を出し、よ

く売れているとのことである。みかんに何かを書き、それに沿って皮をむくと、それがらくだになったり、ウサギになったり、驚くような芸術的なものになるという。そのように人生、工夫していくことが大切である。色々な食料も工夫によって今まで食べられなかった物も食べられるようになってきている。私たちは「文化命令」、「ケア命令」、そして「宣教命令」を統合的に受け止めていくことが必要であろう。

エディンバラからローザンヌへ

歴史的背景では1910年、100年前前にエジンバラで伝道会議があったが、その時に中心だったYMCAなどが、その後リベラル化していった。しばらく前からYMCA、YWCAからCを抜かして「Yに行く」というようになってきている。100年前の会議で、YMCAが世界宣教の中心だったが、リベラルな神学などから影響を受けた福音的なものにより、福音派は狭い意味の宣教に特化していった。

1974年にローザンヌの宣教会議があったが、その中で福音の真理性、福音宣教の必要、全世界のすべての人に福音を、またその中にピープル・グループという概念も出てきた。が、それと同時に教会やクリスチャンの社会的責任ということが打ち出された。この1974年の会議の宣言は今日まで大きな役割を果たし、それが深められてきて、「ケープタウン・コミットメント」が近々出される予定となった。その中の「セクション10」で神の人類に対する愛を一つのくくりにして、「文化命令」、「ケア命令」、「宣教命令」そして「社会的責任、福音宣教、伝達・福音宣言」などの事柄がよく論じられている。

包括的働きの実例

これらの三つの命令と包括的に取り組む具体的な例を幾つか紹介してみたい。

「白浜レスキューネットワーク」

NPO法人で自殺の名所といわれている南紀白浜で活動をしている「白浜レスキューネットワーク」は、NHKでも取り上げられた。富士山の樹海と共に有名である。その近くにある教会の牧師と信徒や未信者もそのレスキューのために働いている。『自殺志願者も立ち直れる』（講談社）という本を、その牧師が出版している。そこでは、自殺を思い留まらせるための働きかけと同時に自立を助ける働きもしている。その結果、できれば彼らも教会員となってほしいと思っはいるが、まずは自殺からの救助を目的としている活動である。

「ファミリーハウス」

シスター・キャスリンがしている、小児病棟がある大病院の近くに大きな家を提供する働きである。小児ガンの子供の母や、その家族が泊まれる施設で、100箇所出来ている。ノン・クリスチャンの人が家を提供したり、クリスチャンの人が資金提供したりしている。

薬物依存症のリハビリ施設

薬物依存症のリハビリ施設としては、「ダルク」がよく知られている。全国に約50箇所その施設がある。「マック」は、アルコール依存症のリハビリ施設である。日本全国に患者が200万人いるといわれ、全国に10箇所その施設がある。

霊的ケアカンファランス

キッペス神父（東京都東村山市）は、スピリチュアルケアが日本の医療の世界に必要なだという価値観で「霊的ケアカンファランス」を主宰している。年に1000人参加し、医療従事者が集まるなかで、99%の出席者がノン・クリスチャンと言われている。

ファミリーハウス以下の4つの働きは全てアメリカのカトリックのメリノールというグループの働きである。日本の社会では、こうした働きは、徐々にではあるが、確実に浸

透してきている。

「ブリッジ・フォー・ピース」

神な直子氏（32才）は青学時代にフィリピンの戦争傷跡のツアーに参加、フィリピンの人の心の傷を見、また日本人で強姦、強盗、殺人等の罪を犯した人々が罪の意識を持ちつつもフィリピンの人たちに謝るすべを知らないことを知る。それでブリッジ・フォー・ピース（NPO）を立ち上げて両方の人を繋ぐ働きをしている。

「MDGsー ミレニアム・デベロップメント・ゴール」

国連が指導して目標設定している。その活動内容としては「極度の貧困と飢餓の撲滅」「乳幼児死亡率の削減」「妊産婦の健康改善」「エイズなど疾病拡大防止」「初等教育の普及」「男女平等の推進」「環境の持続性確保」「開発のための国際協力の推進」など。今世界のどの政府でもどのNGOでも、国連もこの開発目標に沿って、自分達はこの中のここを担当するという形で参加してきている。外国での会議に参加すると、途上国の人々がよく日本人に応援を求めてくることがある。その日本でも今まで国がサポートしてきたが今後、国の年金サポートが危ぶまれるとき、まさに教会の出番かもしれない。

ウィクリフでの経験から

私はウィクリフで聖書翻訳、福音を伝え、聖書によるクリスチャンの成長を目指すという働きをしてきた。またウィクリフは同時に識字教育、読み書きそろばん、衛生教育、自立支援などを大きな柱としてその働きを進めてきた。40年前にはカトリックの人々を助けると非難された時代もあった。

また、ウィクリフの識字教育の働きは低く見られ、もっと宣教をすべきだとも言われた。今になると聖書翻訳の意味も認められるようになった。もともと少数民族は差別され

不利な立場に置かれていた。そういう人達が自分の言葉で読み書きができるということは、その人達の尊厳に関わってくるのである。読み書きソロバンができることによって、神のかたちに造られた人間として、さらに工夫してその地に相応しい牧畜、農業をし、資料を取り寄せて勉強することもできるようになった。結局それは「宣教命令」と共にイエスの「文化命令」、「ケア命令」にも従うことであった。

キリストによる和解の福音

今回の宣教会議では第4回の会議と同じく、「神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ」（第二コリント5:19）が掲げられていた。全福音を神が神の国に向けて着々と進めておられるのである。それは単に教会に人を沢山集めるということだけでなく、神の国の価値観、平和、正義、和解が進んでいくということであろう。

591の言語が全聖書を持っている。さらに新約が1213、部分訳が836、現在進行中のプログラムが2026。そのうち1525（全体の4分の3）をウィクリフが担当している。世界のほとんど全ての言語に訳されているのは聖書だけである。紀元1900年頃までに200くらいの言語に聖書は訳されていたが、その後の100年間で、2000以上の言語で福音が伝えられている。2000-2010年に836の言語が新しくスタートした。

21世紀になってキリスト教が世界的な宗教として登場してきている。1990年代には全世界の教会の中心が南に移り、アジア、アフリカ、大洋州、南米で前例の無いような宣教の拡大が起きた。また1990年の半ばには宣教の主体、宣教師派遣も南に移ったといわれている。1910年のエジンバラでの世界宣教会議では98%が欧米の代議員だったが、今回のケープタウンの会議では68%が

非欧米の代議員だった。今はどこの宣教会議に行っても、ラテンアメリカからドイツ、アフリカ等その他あらゆる英語が聞ける。イギリスの英語もどんどん変化しつつあるので英国の人には気の毒な気もする。

南アフリカで開催された意義

南アフリカは銃犯罪が世界一の国。400年以上にわたる白人支配の国だったが、南アフリカのエリート階級はオーストラリアやニュージーランドにどんどん脱出している状態である。ローデシア（現在のジンバブエ）では白人を国外追放したので、人々は貧しくなっている。国を動かしていた中心となる人がいなくなったので、人々はスラム街にいて希望をもっている。繁栄の神学がアフリカでは盛んで、クリスチャンになれば幸せになれる、大きな家に住み車が買えるという。繁栄の神学の教会では指導者は良い家に住み、良い車に乗っているが会衆は貧しいという現実がある。

その神学にノーを言い、労働の意味を考え、真面目に働き、子供たちを教育し、生きる上で工夫を重ねているという、国を建て上げる熱気を感じたという報告もあった。

このローザンヌでは非西欧の人々の発言とリーダーシップが伸びてきている。20年後にローザンヌ会議があれば、全く様変わりした真の意味での対話、世界の教会が一つであるという意識が高まるであろう。次のローザンヌで若い人たちが出てくることに期待する。

（冬季フォーラムのまとめ）

TMRI 研究員 中川美弥子